はなの栄代梅

二編中

へ13
2919
5

へ 13
2919
5

昭和九年
七月一六日
購求

春色籬の梅巻之五

江戸　爲永春水著

第九回

再説梅吉は忠兵衛を箱根へ旅立せ[illegible]ふは一人の
妹忠兵の病氣を案じて相談して長[illegible]ところへ
手紙を届けるんどの外[illegible]雅おむも枝[illegible]
[illegible]配[illegible]人[illegible]及[illegible]紙十束[illegible]
お[illegible]麻用お入て[illegible]安[illegible]

疑はしゞ梅野ハいまゞ眠つて居るゆえ お鶴ハ浄瑠璃ばかり
髪を拵け化粧をして居る所へお三ハ勝まうと出て行
お勢さんハ今朝早くおきてゝ直
上へまうしたとやまうしたそうでございますと
拵うハモウ遅くハ左様ごらうノツアノお三ハ同中私の母
お居と女中達ハ皆々揃ゞ揃ゞこのゝ三ツアノ多お三ハ
玉ふ結合てたろうを出て宅へお二人ゝ麦藤
乃容儀でござゐまして子工 左様さぞ母様が悦ばて

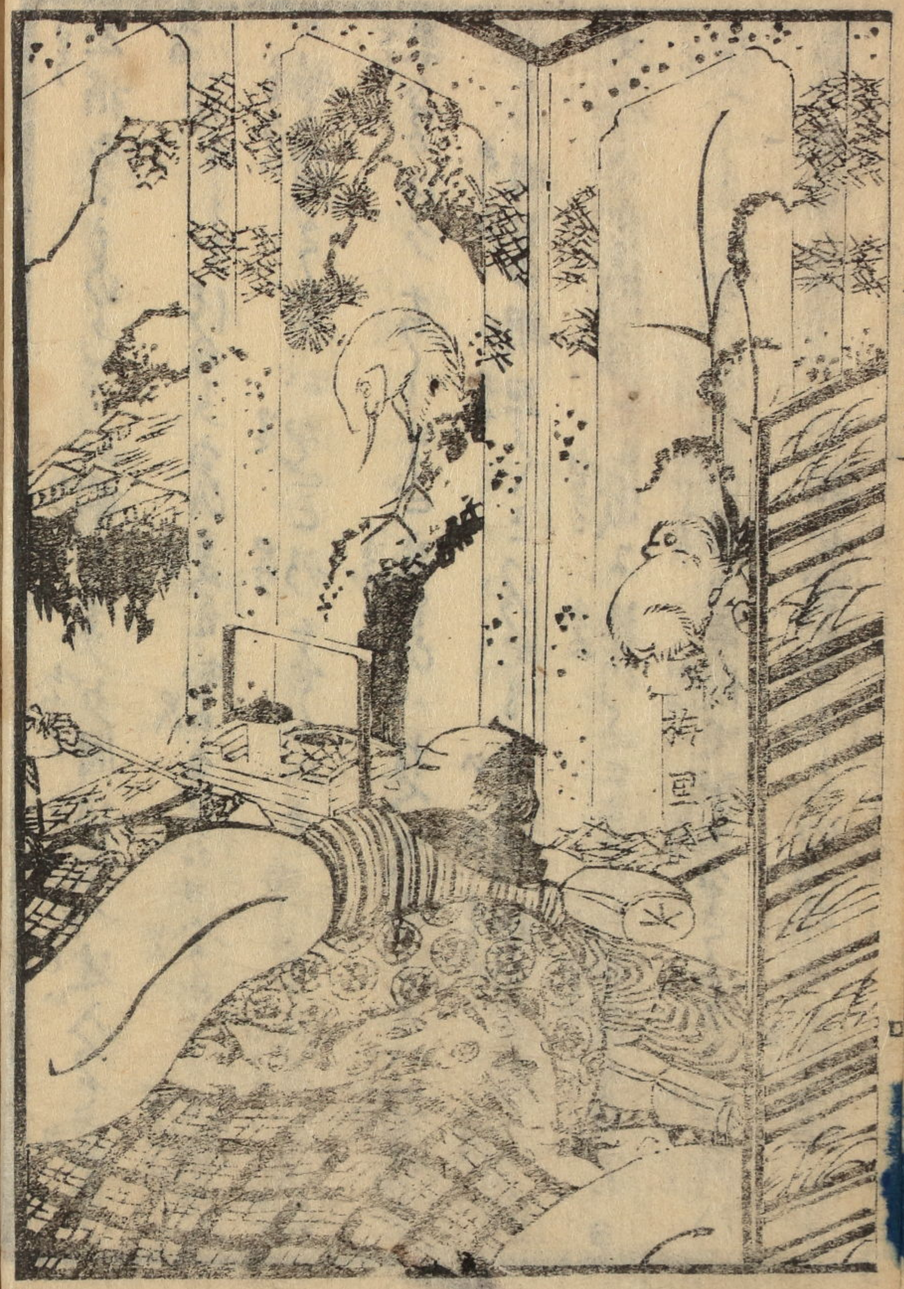
乃至ゆきてこらうノ三ツイエ母様さんハ毎日ゝ粧奇のお供
あやゆうで他へたらう出てお出ばかりあきるまゝ
夜ハ宅ゆ出でごらう 三ツイエ夜ハ仏壇宅ゝ寄きて清さんが
止宿裏ゆ出て成ゝ弟子房さんがお出あきるゝ代ゝ寄ゆ
お出て母様さんハ毎夜乃本宅へお眠をまゝ
左様ゝ出来まゝ母様ゆ言付らきて左様ゝのゝハゆえ
三ツ〳〵仕様ゝ〳〵まゝて貴様をお歌〳〵ゝとだちゝ面
貴様がお留守の中ゆお淋〳〵がりてモウ帰り

そふみのごお能ハ家内がゑしく あひのう初らん 舎り男ハ
や 墨ものあひ 夏さんりお三左板ぢやケあひうあんぞを毎 女左板
ちの家 ちゃ〳〵ヨ あ〳〵 ヲヤ〳〵 西みこをを書て お三ゞ紀を藤〳〵
ぐうせるぢをを久 三〳〵 王〳〵 実夏ぞどぐうあちョをを水文
アノ小濱さんと左衛お方ハ島雅さあの夏ぞうう種く間
あさうう〳〵 お島さんとう名号お方ハ四本宅の若旦那のあとを
幾度も〳〵 お使ぢ成〳〵 私ハ青〳〵 国り きく〳〵ヨ ヲヤそ
あて其日報ゑ忠さんハ一度も お出ぢ あううこの夏 三〳〵 ハイ

度もあ あうあるまあんたしう 旦那さあが若旦那様お島さんと
お逢せ 成ゑ 様〳〵 お夏ゑをうとぞんじまハト 物語を
夏〳〵 抱れハお話もやうやく安堵して 自然と嬉しき笑
顔の鏡 ゆうる 併 お三ハ視あうう 完ゑ笑ひ 三〳〵 ヒヒ
接ぢ せ そうう〳〵 お顔の貴様とさ 恋て十二 旦那さあが部
他の女中に 成 ぢ 〳〵 ヲヤ
お三りうげんゑひやうゑトの時 梅男ハ 目を覚〳〵 と
ハて映 ぢらひの間へけ ハ ヲヤ お紀 成〳〵

浄瑠ハ汲んざのく三ハイお採側へまハしてあまりさ
ゑ〳〵そもちやアなやく膳ノ支度を仕るヨ三ハイモウ
膳をせいさーて並ましとドレ出来を入ませうト勝手の
方へ立て行ハお熊ハ梅里の寐うる家のうち
ヨやく
お熊さん今お記あまちうとでハごさるませんう梅
ヱ左様ヨ起
て見ごらんなさいと拵ごうしまさうへ
這入なさのご
ヱアサモウ記あまさるを今朝ハ私ハ寐ぼれて
おそく記まーヱアヨ已刻ごろでごさるまいとサ梅
ヱ左様

左様ものうアお孫もモウお周ひ家へ送入て寐るナ
ヱ〳〵ほんのうあを文を
う華蓋さんがお出ごと行ませんハヨ梅
東ぶるけノちーまぶ氣まハねえ文亭さんハ
だら明日の朝早くとうても手ノ刻待ふナヱサ
文亭さんの寐ると成る梅
使くでるお出の時大ぶ早紀でおまるうち由新ハ
ありませんさくお記成まーといふのハ意勝れ



梅里
梅里が
貴子島の
桑の上に
坐る

とかくの女らに記まされて梅田まで機嫌よく記よう
作者目をまた文席の中の勝ちまる人此ちらもあまた言葉
なかなかの名前でも何とも出来て何とも言う男の
口の悪くなるものもあり中人你てわる事もなるの事
ぞも下ざめまへ狗夕の字記るも女の口から邪見に
艶めく事らしき言葉をのんで支を職める
様に従国悪くまるものあり差何ながらく浮世
中もたま気ずき者しく交りで亀悶をまちしと存

ざる様にまでくだ人ろし
梅「アリ 銘記るのが太儀の様ちやア すみれ人ドレくく
記て世間をうし まちら。ホンニ今日は閑月庵の月並を
あしらへて歌さらへひけをとるるば銀鶏さんの所へでも貪の
えまりに行ちがよいあり。サアく 思ひ出しから大きに用が出
来てまさいや義羅ある人らが出来たの「十二義羅るから
まるものでござるまいのから夜中で日本ふる悪らる
当らうとましく幾るが思く るうましく 梅「スこし十二江の鴻

ごろのぢ汝風も大そんざ　多「ヲヤそれぢゃ　おむさんもおれ
さんも　御殿　ゆうるが男〜ありまし　梅〜そそやアそんな所
そなーと小演の一件と後家さんの浮りハ　御殿しうう　頁
らんノウ　多〜ナニ子　絶　夜八　私もあんごる　鏡ごりて　居ましごま
今朝　あ　考へて見ましたそれハ　一直　両
女の　不分間通　さるが　頁ごるましょあんでも　二女が
相談せして　早く　言ぶ　おむさんとお　おきんも見　そそ
らまましとりんかのちと男の　知紙せる　多限で　要ふ

多ってそれ　自然と男の男ハ　結ぶ　命　計　あるを
ハ　上　変　遠ハ　ごるあ　ましたんのサ　そそごうう　今　出　とお
言ふるのハ　ごでごるまましヨ　梅〜左　根　クノ　その　筆限
の通　そそ　鳥雅　さんや　才ぶ　引ッ　けらまて　両女の　方へ
ごりて　法て　居る　根ごる　大変ごうと　言って　鳥雅さんまま
義理の　涙ハ　女達へ　計　て　只　落情　情の　根ふ　別ふ
出　ましー　ごうう　ごうう　ごうう　変　そそ　ノウ　ナニ子
そそハ　そそ　時　そ　ごる　おむさん　お　女　ふもよく

言ふ〳〵やて何程かさうぐし〳〵あるひ程よ仕方がある
ちやうハま　梅〳〵もしも身が此程る度ぐ出来さうバ何程
きるる気ぐ〳〵ヨヤそまぢやア御来て居ます子
ト膝を梅里の方へ寄うけて自若と顔を視つめて問ひ
よ考る　〳〵私が申　途中も胸騒がするうつぷて引　何事
御来さんの身にあんぢ来て居ハ仕方ハ知れぬ人をやき
ちれ生涯で御主ぐらう義理ハい度を言てくれ　女が
あるもまるとと直よ　御来さんが意地がるぐらうと思ふと

案の如く左様ぐらうト涙をうるる　〳〵女郎流でも喧嘩流でも
〳〵本須御来さんが大枝ふお賞ものさ浪和町の袁の
根でぐるまるま　私が桐坂町よ居る時分　うるんでも
御来さんが用ゲけてお主ある程ぐらうハテナと考へて気を
付て居る〳〵〳〵そ申　時しいトぐまるるもつても腹を立て
おー顔を赤くせ〳〵風情ハ格別よ美事〳〵
腹を立て顔丁電数のぐるもぐハあるとと思ひさるん
が義〳〵あるく私美人ハ法さも笑つても腹を立てる

始んでも起てもそれ毎に常あるべき数ゲ現人
ばかりとも男の情ゲまたものなりとぞあらー
腹をうつゆも思入あって情合を中くこー腹立の
ひきうるー新蕎麦焼姫ちーて喰ゲたる邪鬼の面
色ゴハするべうぞよるーしーて坪成ゲうる人
無ヘンサ[illegible]ンゲ[illegible]も食ゲたりゲ思推量み変ちう
りゲノウまーしー[illegible]ゲあるうちの変を考ゲて見れ
ナ他ヘゲりふも[illegible]ーい変ちゲ似ちあの人変ゲ[illegible]ゲ

此身も[illegible]と同ー根又一途る亂ごうう減多ゲ根や呼女
ゆも[illegible]出ーゲ伝ちとるもゲー情人ゲるうちう未婚終ゲ思ー
那とも女房ゲすー亂まーるる亂の女でゲけ見ぶんゲーも
出来ねゲと不貞申をーて居てやうーの変で見ゲ対ーー程
の大ゲの女房を持て居て他の女を看ゲを
もするもの[illegible]ゲ系ごとゲーても自慢らーゲ此身の他ゲ
男をゲ羨ちでも見てくゲ見ゲ人と安堵ーて居る他ご
ちゲ[illegible]ゲ[illegible]ゲ嫉妬周志ゲ此根ゲ[illegible]ゲ[illegible]ゲ

あてお宛ぶのおぶのとりふまつて居る身
分でハるひう殊く屋蒲のヤ重う殺ラて小鹿のため
ねん
婦とさんとりハ生そふみ変ゝ為りて居るのゝお帯と此
身ぶ嬢私宮宛をして居ゝ生も赤ひぢやアねんゝトらハ
生て お殺も 完ル笑ひ 為ハ〳〵そゝ生でハモウ此後
安清〳〵て居ゝ生 梅〳〵左様ハ伺もく
同〳〵氣で居てハ赤ねん生ゝ人ちつゝまぢめまる
ぶい〳〵ト笑ひて居る

第十回

春深〳〵峯の嵐ハ散花の宮ある茶汲ぞする深山の
奥も哀の路ハ絶へぬ浮世のたぐまる彼の鳥雅お宛の
人〳〵ハ むの 恋氣こひ ぶく 楽しき中のひゝ ぶく
時刻ゝハ早ゝ〳〵春の中旬のゝてゝたゞ初て登ー
箱根山今年ハ暖氣の例ゝ年も十分ゝて夏ゝ同じき
時候ゝ暑ゝ暑中ひゝゝハ祝ぐも温泉ゝ推バ酒
落人の春ゝハ帰合ハぐ宿とりて氣ちぐさ〳〵やら奏治

やうゝ入集ふ人もかるゝゝびあやうけなこバそなたを法華の道ふ
おて湯治るゝゝの藤 喝女 浮世理 猪軍 書潰て 破而ふ
宿をかり月限の人ぎを 産蒲の性ゝ 思ひの外ふ 聚ハひ
けもバ おゝ紀ハおゝかの氣をるゝ さめんと喝女を呼世義を文の
実ふ 住ひ 席に終日 拵ひをて 旅宿ふ 浮世又ハ米を文
新孝を連て 山の景色を見物ふ 鳥雅ハ 見角 氣
芽情 ゝまハ 貸産の 留守 居ふ 殘を 繕本 ゝ馬紙ふ
拵び ゝゝしけるゝ 点屋しけもバ 民一人 借限ふ 産蒲を

立ぬ 舞の風情を 様やんと 様ふり ひゝる 葛新人ゝ ゝ
一人の男 島雅と 魚を見 合せて
ゝ 寄れゝゝ ゝゝと 島へゝゝ 素樂 さんゝ 拵ふして
ぬゝ ゝけて ゝゝこのゝ ゝノ ゝゝ 此方へゝゝ 淋ゝ ゝゝ
ゝゝたんゝゝ 完へ 立て ゝゝと 元の 産蒲ふ ハまバ 素樂
潰ひて 産ふ 付 素へイ ゝゝ 拵ふ 機嫌ふ トキ 貴ハの
ゝ 腐氣ハぞんゝの外ふ 四ひふ 私のハむゝ
ゝ 娘ゝ 拵ふ 温泉で ゝゝハ ゝゝ

のふうう其故で連て来るがナニ家早こまても全枝工程ま
あるまひうう迫くの中に呼ぶ声
ざうまたうそまこ八郎ぐ忠さんのお供をして宮ホ
を急ひで来ぐ　鳥〳〵　方振ふそして忠さんハ行
ぬ〳〵お生ぐ　鳥〳〵　工忠さんハあゝ宝紙お願ま
たうう先の宿く　脇ぬッうう述んでお生成まし私もく
ぬぐ　鳥〳〵　貴君方ホお見ホかうあ
ぬ　鳥〳〵　諸方をお尋ね中

鳥〳〵　左振ろ丁度出ぬと振るまんぐ今ホ行ぞ
ぬ駿亮を住報まる中ホ茶屋が障りて来るぐうう　イ
ナニ内雑亮ハいうで　ぬまぐ買でぐうまぐおおきんが大変
ホ内病気がむづかしいとの八内多紙で忠さんを梅里さんが
うう　お振ま　ぬまうホ付て私が内限居行へ行合して直ぐ
お振ま言付ら来て参ぐこのでぐうまぐまぐおお多紙の
振ぐ　鳥〳〵　遠八ぐき忠さんをも呼ぶ戻ぐの八祖父ぐら
空でも急ひぐ　悪ひのを大病と書て来ぐこのぐうの行

ふしぎもお米さまで来て長くなる人宅に注文をして銚子に行くと
家もまた新孝もさぞとろこんぶらん　高　イヤ　そもそも安心するぞ
ござるまた私はまことお供をして参つてもあるさん
ぢやうけうぬいろことろう実に　お案ドナて途中も安さんと
種々おそるしを仕るべく条じ　キ　ドキ　トキニ　旦那　殿今時
まろふ付て思ひ　ごけあん　お方ひ　お目ひ　ろ　ま　きしこが　貴人
ぢやんしでおらう　高　ハテナ　誰ひ　逢ことのぐ　高　イヤ　誰
ひぐどろでハござるません　貴者を　表まろて　頼つて　おを

きろことろふあるうんまサ　島　アハ〳〵〵〵　分をころうるひ　度を
りのごうるうれ人　高　イヤサ　ほるうう　後人　度ハどざるませんあ　別深
の深ろこと角のあるうん　落雲さん　お目ひろ　きしこ　島　ナ
美を見さまるうう　高　イヤ　分　狐りこして　狐ひ　度てハどざ
るません　実に　私も　勝をつぶしまして　落雲さんも　面義
ひ　所で　逢こと　ハ　行て　真に　お茶さんの　お　ろ　出まして　決を
こぶして　私に　陪この　分解　狐　ろ　歳ろう　酒　待　狐　狐
様をりこして　居まして　中に　茶さんが　此　地に　本て　ろを　北　歳

駿雄
温泉にいろう

夏を左板や生まれうと腹へ出まして仏をもかさば
ゆ別是で来じまうと島へヨヤ〜そまハ男ひ子の夏さにて
仏根りゆるで湯治よ来て居る板ぞ客人ぞも連ちれて
来うう　豪「イ五十二薄雲さんの実の親父さんゥ親知ばよ
知らぬで年久し〜別是てお生成のがけ女身れてお出ぬて
その親父さんが薄雲さんの病気で生のを身清して
医者ゆ医者幾おろけるきろてゆう〜ぶ〜お役成さ
所で気保養の為ゆ親父さんが連て湯治よ来てお生成と

いふ夏てあざるまぬ夏をも遠京ぶ〜
その親さんの所生るさるまで私〜紀成まし仏と
居ても島渡あるさんて達てお上成ずハ子ぬまん
宣ゆ仏根も男ひ込でお然ひ来てお生のゆ遠ひぞるは
せんあるとしいるでぞるまぬト聞て島雅ハ子日の送と
男ひ子〜京都より保子し子演ハ松ひと京まし子成と
仏捨しゲ毒楽のさるを債男べゆ便とう毒様の数ゆ
恋の情あるまゆ子るつじしくるとしとぞ

蘭雲の実の父とのゝ所の富限そばく
続く 男家 宝田豊治とて居る人の三男豊三郎と
いひし者ありしが十八九年に成父の勘當をうけて居た
る鎌倉に住居するうち国の縁者の方を
便りに奉公して居所を流浪せしが其頃放蕩の仕方
一人の女を聞ひ亜既に二人の女の児を産せ姉の方を
母あづけて育て妹を産せる時家産勘當世話
たとびとりしに女を世話をする力もなく困る

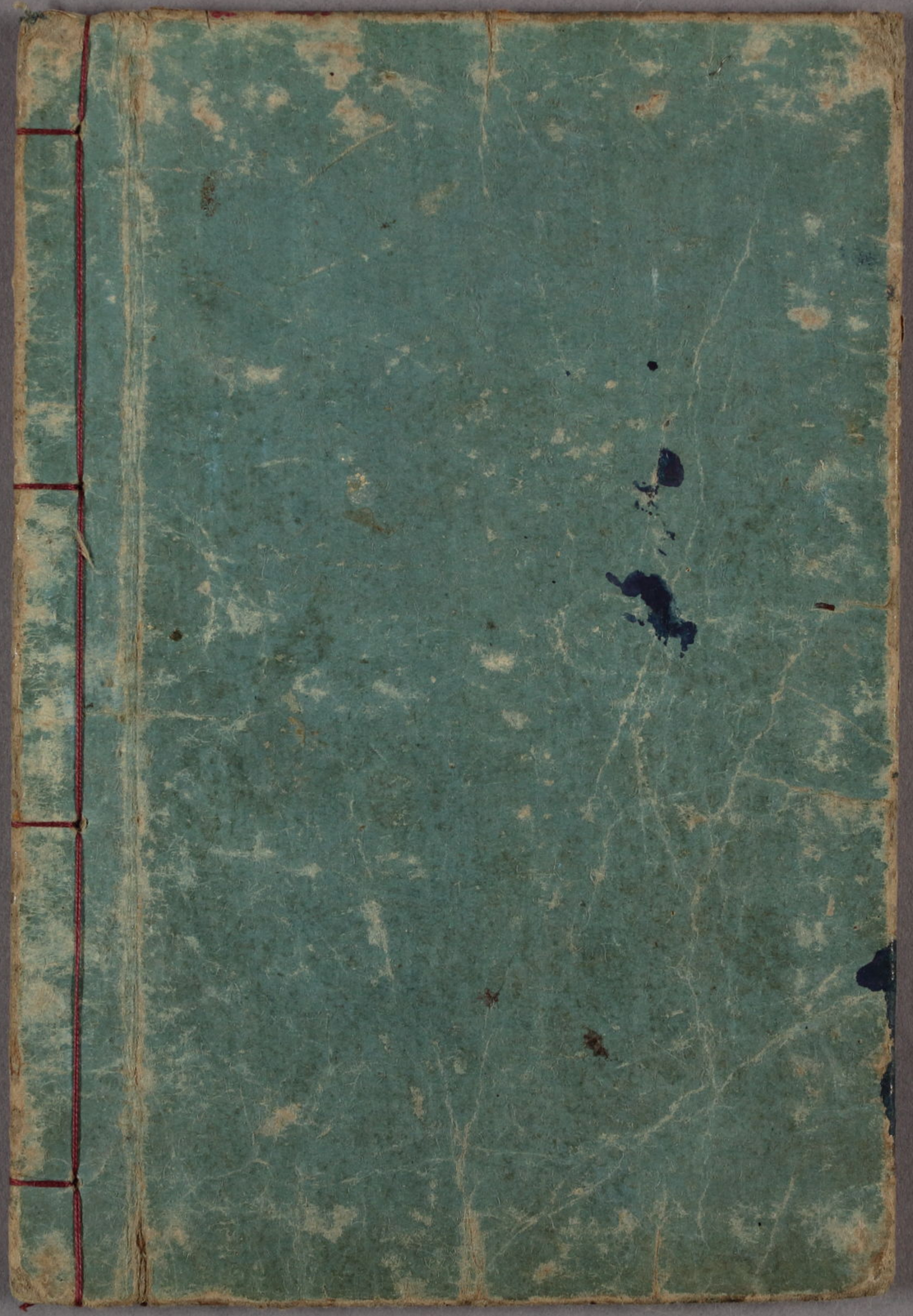
切の金を子にして別れしより千後その女八年せて竟に姉妹の
と見ともに他人のまれそどそれら是二人とも後母のうち奉坂
あれも姉八姉を川のあ濱妹八則ち浦西さりしとも
実の父母に早く別れ後母も住所の解り人なれば
小濱の母と蘭雲の母と親しく和らぎ中よりの姉も妹も幼ありし
年の内あるたびに和びる毋しありさて豊三郎に浦会
を流浪して知るそどげるし穂くの浦業をの数年を
和しくもあき身分をさしげに古々のあるうしく安中人

主人
主婦ならで他人を頼まゝ父の勤く氣と銭て貰ハん
はゝへこの第一瘡元ゝて父も老病ふ為ゝ他ふ家を待男子
ゑけとゝ豊三郎紙呼戻ゝ勤當をゆゝ早く家督を
譲せんとその仍家を親類一同ふ云ゆゝる折ゝ父豊
次郎ハ本ふよろこび真ふ家をあゞり けとゝ豊三郎ハ為ち
萬金の主となり仍ふ為ゝとゝ人どもゝ身も四十ゝ過ハ
ゝ紙持ゝ来ゝ文ゝ紙ハ
すぎ
ゝ麦の者ゝ児女の変を思ひ穏ゝと同合せ

やうゝの変ゝて落雲ハ赤子ゝ別ゝ根とゝ人が
ゝ度の身清ゝハ有ゝとゝ初てもりゝ豊三
郎ハ姉根と小濱と人新ゝ関孔ゝ極ゝ居ゝ
為ゝその母も故人とゝ小濱ハ松が浦尼寺ゝ時
やうやく婦支川ゝ婦り住バ尋ね来ゝ
ゝ雲ハ
唄文と関ゝ人為ゝ実の姉とゝ人変ゝ今ふ
あゝ姉妹の中とゝ

贈將あるて　島八工　嘉樂さんお茶の弟のが寛正たろうを
まさろう関て　捨てもおろ長るひが　伶振しこものごらみろ　寿さ　左
振丹　義是そみて　的が　吸往の実意でお主　義のをこれぎアを
ろてお伝年　ちろちやア　冥利がころへどざるまろろ　昆服
逢ふ　おるるがよろしふどざるまろ　方一　當將の　的
でハお逢ひるさる　方ダ　儒ぢやア　どざるまは　お茶のおるうん
ろうバ　出　勅　ざ　世ハ　衣具でも　あて　上ろろ　新造でも
出ろろろ　入用　ありませろうが　寛早その　九紀を　義ふ

不及　安中の　大富限　宝田の　振　乃と　為川と　為雲さんで見
長バ　伶も　ひ方の　ふ　ろ人ひと　長人　為川　為雲まは　為人　ア　ろ
左振ハ　中ものく　浸月が　大変で　どざるまは　せろうろま　島　浸月が
せがうしひとハ伶の　変て　八工伶の　変ことを　伶ひけ　ども
ろるる　お濃さんも　再嫁　嗅女　方川て　一嘉　花美ふ　お茶さん
を引　対ろつろて　お出ざらへし　お花さんハ　お絵さんと
の人　腰　押が　対て　振て　踏よ　お茶さんも　義是と　おろて
お左　ろるる　中の　変　甚行へ　ろて　為雲さんが　長い　月見を

ゑゝ　がてお至るとゝ旦に身体よ而て自由に
お前さんの方へも便りが知れる　新ぞく　何ら面倒ゝ
を　変てよりませう

春色籬の梅巻之五